

LINEコミュニケーションにおける トラブル行為の様態と パーソナリティ特性に関する研究 —現実との連続性と傍観行動に注目して—

若本 純子（佐賀大学）
西野 泰代（広島修道大学）
原田恵理子（東京情報大学）

はじめに

LINEはいまや児童・生徒の生活の一部

- ・ 15～19歳男女の96.9%がLINEを使用

(MMD研究所, 2015)

- ・ 15～19歳男女のスマートフォン利用時間153分のうち, LINEの使用時間は110分 = 全体の約7割

(ジャストシステム, 2015)

**学校教育現場は, 児童・生徒の
LINEコミュニケーションのトラブル対応に追われる
➡学校教育・学校での支援に有用な
知見の蓄積が急務**

児童・生徒の LINE コミュニケーション の特徴

児童・生徒のLINEコミュニケーションの対象

- ・友人や家族等，身近で親しい人々
- ・相手が親しいほど頻用

→親しい友人との対面コミュニケーションを物理的に離れた場にまで延長するためのツールとしてLINEを使用 (土井,2014;若本,2014a,b,2016)

LINEコミュニケーション・トラブルの検討では現実の対人関係や対面状況でのコミュニケーションとの連続性を仮定する必要あり
しかし検討は不十分

児童・生徒の LINE コミュニケーション トラブルの特徴

小学生・中学生・高校生を対象とするLINE コミュニケーショントラブルに関する大規模調査 (N=2085;若本,2016)

- ・ **高校生**では、トラブル行為をされた・した経験双方がある者が有意に多い
 - ・ **トラブル行為をされた・した経験双方がある者は**、トラブルに遭った際の被害感情が低く、LINE上での個人情報への扱いや匿名性を不適切に理解する傾向
- ➔ **高校生の情報モラルは情報リテラシーに比して低い**

高校生のさらなる検討が必要

LINEいじめの
抑止・介入の
ために：
傍観行動と
パーソナリティ
要因への着目

高等学校から報告されたいじめの第2位

「パソコンや携帯電話で誹謗中傷や嫌なことをされる」

18.2%(H26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」)

- ・学級内でのいじめ数と傍観者数が高い相関(森田,1990)
- ・傍観者に焦点を当てた介入がいじめ行動の抑制に効果的だとするメタ分析結果(Polanin, Espelage, & Pigott, 2012)
- ・仲間はずし, 悪口の書き込み等のLINEいじめの加害行為は個人要因と関連する可能性が示唆(若本,2016)

- LINEいじめの抑止・介入・予防のために
傍観者・傍観行動に着目した検討
- その際児童・生徒の個人要因も含む必要性

目的

本研究では、学校教育や学校での支援に示唆を得ることを主眼として、**高校生**のLINEコミュニケーショントラブルにおける傍観行動について、**現実場面との連続性**および**パーソナリティ要因との関連**に注目して検討を行う

方法

- ・2016年6～8月，高校1年生(A高校321名，B高校324名，計645名)に質問紙調査を実施
- ・傍観行動(場面想定法)：大西・黒川・吉田(2009)を参考に，回答者が傍観者の立場にある3種類のいじめ様の事例を，状況(対面・LINEコミュニケーション)×対象(仲がよい友人・さほど仲よくない友人)4パターンで示し，そこで自分がどの程度傍観行動をとるか回答してもらった。12項目4段階評定。
- ・被異質視不安(高坂，2010)：友人関係において異質な存在と見なされることに対する不安。11項目5段階評定。
- ・ソーシャルスキル(嶋田，1998)：他者に対するポジティブな働きかけを示す「向社会的スキル」10項目，「引っ込み思案行動」8項目，「攻撃行動」7項目の計25項目4段階評定
- ・その他にフェイス項目として，性別，学級

結果・考察 因子分析

- **傍観行動**の因子分析結果：**4因子**(各3項目)が抽出
対面状況×被害者が仲がよい友人の場合($\alpha=.79$)
対面状況×被害者がさほど仲がよくない友人の場合($\alpha=.87$)
LINEコミュニケーション状況×仲がよい友人の場合 ($\alpha=.87$)
LINEコミュニケーション状況×さほど仲がよくない友人の場合
($\alpha=.88$)
- **被異質視不安**は主成分分析により**1因子性**が確認
($\alpha=.89$)
- **社会的スキル**では、先行研究どおり、**向社会的スキル**
($\alpha=.74$)**引っ込み思案行動**($\alpha=.86$)**攻撃行動**($\alpha=.84$)の
3因子が抽出
- 使用する全変数において**学校による有意差がないことが確認**されたため一括して分析
- **男女比**：男子321名(49.8%)女子324名(50.2%)
- **年齢** $M(SD)$ ：15.27(.45)

傍観行動と パーソナリティ要因(被異質視不安, 社会的スキル)の 関連を検討するために相関分析を実施

結果・考察 傍観行動と パーソナリティ要 因との相関分析

表1 傍観行動とパーソナリティ要因との相関分析結果

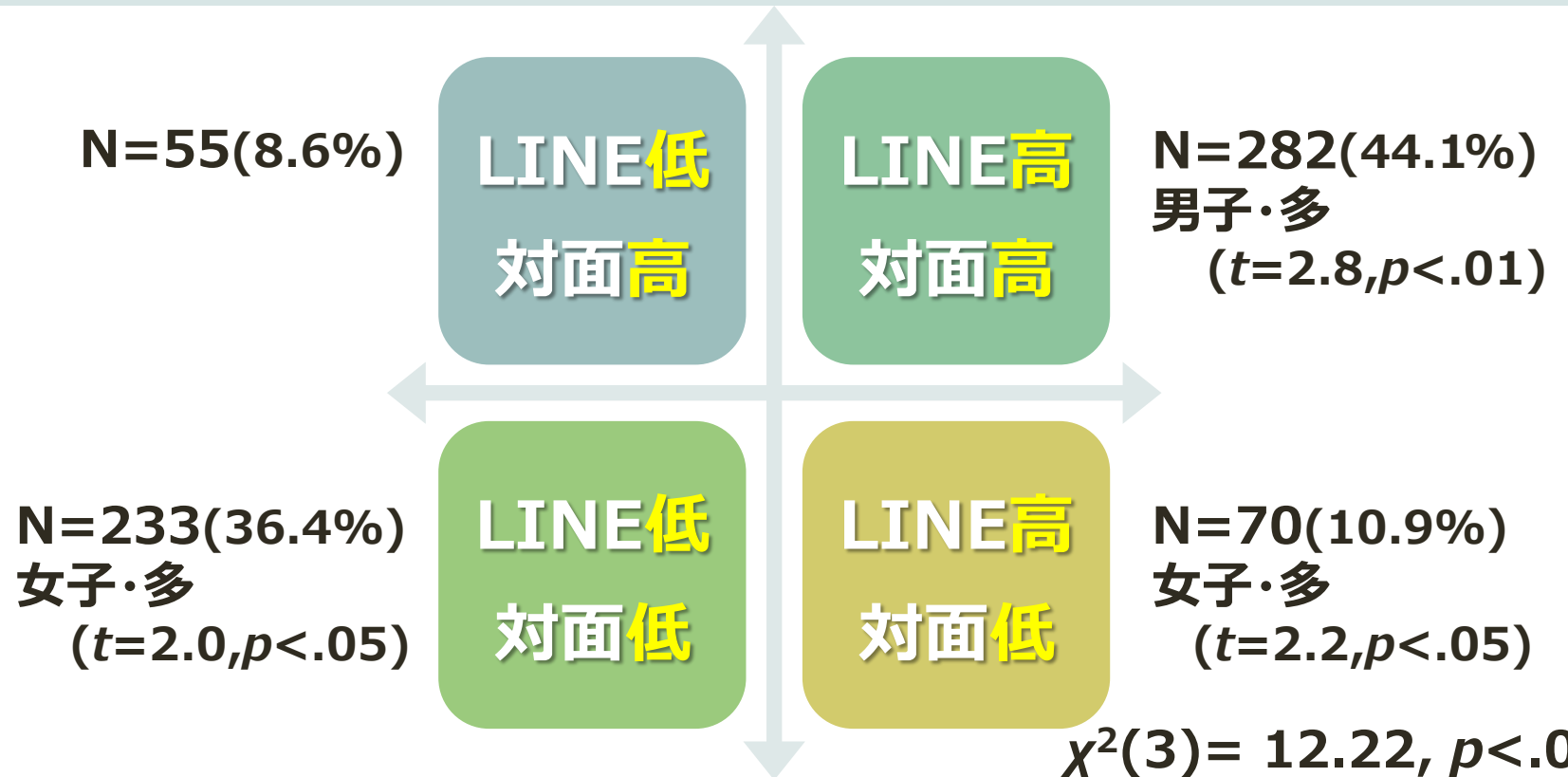
	被異質視 不安	向社会的 スキル	引っ込み 思案行動	攻撃行動
LINE・仲のよい友人	.18 **	-.22 **	.16 **	.09 *
LINE・さほど仲よくない友人	.19 **	-.17 **	.10 *	.08 *
対面・仲のよい友人	.22 **	-.24 **	.15 **	.12 **
対面・さほど仲よくない友人	.24 **	-.17 **	.09 *	.11 **

注) **: $p < .01$, *: $p < .05$

**$|.08| < r < |.24|$ の弱い相関しか見られず
→LINEコミュニケーション状況, 対面状況ともに,
傍観行動の生起はパーソナリティ要因と直接的に
関連しているとは言えない**

高校生のLINE使用と現実との連続性を踏まえた検討を行うために、LINEコミュニケーション状況、対面状況それぞれの傍観行動得点の平均値を境に高低に分けて組み合わせ、傍観4群を作成
性別の関連を検討するために χ^2 検定と残差分析を実施

結果・考察 傍観4群の作成 と性差



LINE高・対面高群とLINE低・対面低群に 約8割が分布

→ 高校生の傍観行動は状況によらず一貫している？

表2 対象×状況による4傍観行動得点間の相関分析結果

	LINE・仲の よい友人	LINE・さほ ど仲よくな い友人	対面・仲の よい友人	対面・さほ ど仲よくな い友人
LINE・仲のよい友人	—			
LINE・さほど仲よくない友人	.65 **	—		
対面・仲のよい友人	.68 **	.46 **	—	
対面・さほど仲よくない友人	.50 **	.72 **	.59 **	—

注) **: $p < .01$

|.46| < r < |.72| の中程度～強相関が見出された
最も強い相関 (r=.72): さほど仲よくない友人の場合の
LINEコミュニケーション状況と対面状況の関連
 続いて相関が強かったもの (r=.68): 仲のよい友人の場合
のLINEコミュニケーション状況と対面状況の関連

結果・考察

高校生の
傍観行動は
対象によって
比較的一貫して
いる

LINEコミュニケーション状況，対面状況を組み合わせた傍観4群と パーソナリティ要因との関連を検討するために 1要因分散分析とpost hoc検定(Tukey法, $p < .05$)を実施

表3 パーソナリティ変数を従属変数，傍観4群を独立変数とした1要因分散分析結果

	1(LINE高×対面高) 2(LINE高×対面低) 3(LINE低×対面低) 4(LINE低×対面高)				F	多重比較
	M(SD)					
被異質視不安	2.86 (.82)	2.63 (.78)	2.44 (.79)	2.71 (.73)	12.13 **	1>3
向社会的スキル	3.10 (.34)	3.15 (.34)	3.26 (.39)	3.18 (.33)	8.31 **	3>1
引っ込み思案行動	2.02 (.59)	1.96 (.50)	1.84 (.59)	1.89 (.54)	4.51 **	1>3
攻撃行動	1.72 (.44)	1.67 (.44)	1.60 (.48)	1.76 (.50)	3.21 *	1>3

注) **: $p < .01$, *: $p < .05$

すべての分析で，LINE高・対面高群，LINE低・対面低群間に有意差
 →状況によらず一貫して傍観行動をとるか・とらないかが
 パーソナリティ要因と関連

結果・考察 傍観行動の さらなる規定因

コミュニケーションの対象と状況が 傍観行動にどのように関連するかを検討するために 対応のあるt検定を実施

表4 傍観4群別に実施した傍観行動のコミュニケーションの対象と状況による違い
(対応のあるt検定結果)

	仲のよい友人ーさほど仲よくない友人			LINEコミュニケーションー対面		
	M(SD)		t	M(SD)		t
1(LINE高×対面高)	2.74 (.58)	3.41 (.45)	16.12 ***	3.14 (.47)	3.01 (.41)	5.40 ***
2(LINE高×対面低)	2.15 (.41)	2.76 (.37)	7.85 ***	2.88 (.41)	2.03 (.32)	11.97 ***
3(LINE低×対面低)	1.45 (.40)	1.99 (.56)	13.89 ***	1.70 (.44)	1.74 (.42)	1.45
4(LINE低×対面高)	2.00 (.40)	2.75 (.36)	8.89 ***	1.96 (.32)	2.79 (.29)	14.88 ***

注) ***: $p < .001$

対象(仲のよい友人・さほど仲よくない友人)→**全群で有意差**
状況(LINEコミュニケーション・対面)
 →**ほぼ群の特徴通りの有意差が見られたが、**
LINE低・対面低群のみ状況による有意差なし

結果・考察
傍観行動の
さらなる規定因

高校生の傍観行動は対象との関係性に依存しており、仲がよい友人とそれ以外の友人への態度・対応が異なる

LINE・対面ともに傍観行動をとりにくい群は、社会的スキルの高さ・被異質視不安の低さというパーソナリティ要因も関連して傍観行動を抑止か

総合考察
学校教育・支援
への示唆

LINEと現実を連続して捉える：児童・生徒の理解にもトラブルの把握・支援にも有用

LINEコミュニケーション・トラブルはコミュニケーションの問題：情報モラル教育への活用

傍観行動の出現は対象によって異なる：対象や文脈を明確にしたいじめ指導の必要性

総合考察
今後の課題

各要因の効果の比較

いじめの文脈を含んだ検討

研究成果を反映する予防プログラムの作成